保育園を自分の家のように思って安心してほしい

このスラム地区に初めて支援の手が差し伸べられたのはそれよりも 10 年前。教会の支援でタイプライターや英語といった職業訓練所が開設され、その後女性向けの職業訓練も行われるようになりました。年月が経ち卒業生たちが家庭を持つようになると今度は保育所が必要となり、バーンテープ保育園が始まったのです。

苦しい生活は劇的に変わりません。親は毎日の仕事に追われ、子どもの世話をしたり遊ぶ余裕はなかなかかありません。切羽詰まった親に暴力を受けたり、両親の激しいケンカを目の当たりにする子どももいます。麻薬や飲酒の問題も身近にありました。そうした環境にある子どもたちをジムさんはひたすらに抱きしめてきたのです。

「子どもたちにここを本当の家のように思ってほしいんです。家に帰って親がいなくて寂しくても、ここに来ればもう一つの家族がいると安心してほしい。子どもたちに幸せにはなってほしいと願っています」とジムさんは言います。

上：昼ごはんのあとはお昼寝タイム。左：教室はカラフル。肩つないで食堂へ 右：「いただきま〜す」

地域とつきあって 25 年。ジムさんへの厚い信頼

ジムさんはよく地区をまわり、住民たちに声かけていきます。「こんにちは。しばらく見なかったわね、元気にしてた？」「ごはんちゃんと食べれてる？」「足はよくなったかしら？」。ジムさんの姿を見るとみんなが笑顔になります。途中、保育園の卒園生に会えば「あら、学校お休みなの？」と様子をうかがい、その日保育園をお休みした子どもには「明日は来るわね」と促します。ジムさんの顔を見ると、思わず悩みを打ち明けてしまう人も。そうした時にもジムさんは親身になって耳を傾けていました。

一緒に歩くうちに、ジムさんが 25 年もの間、この地区の人たちのためにどれだけ力を尽くしてきたかが伝わってきて心を打たれました。「後任の園長先生が見つかるまではまだがんばらなくちゃね」。穏やかな笑みを絶やさないジムさんが子どもたちの幸せを願う、その思いの深さがとても印象的でした。

左：使われなくなった線路際での暮らし 右：地区のメイン通り 下：住人に声をかけて歩くジムさん

マレットファンとの出会いは？
How did you meet Maletfan?

右：マレットファンのムアイさん
左：ジムさん

出会いはもう 10 年以上も前。マレットファンの 3 人は私にとって妹たちみたいな存在です。本当に純粋に子どもたちのことを思って活動していて、そこに共感するんです。彼女たちのがんばりに、姉のような気持ちで私ができることをしてあげたいといつも思っています。

マレットファンを設立する時、そして設立まもない時期に寄付をしてくださった、そのご恩は忘れられません。役員をしていただきたいとお願いしましたが、「後ろから支えるほうがいいの」とジムさんはおっしゃいました。マレットファンの活動を深く理解してくださっていることに心から感謝しています。（ムアイさん）

ジムさんのマレットファン（夢のたね）は？
What's your "Maletfan"?

子どもたちが今もこの先もしあわせいられること。それだけなんですよ。